



大学院生の頃、春と夏の休みはたいていスペインにいた。正確には、スペイン南部アンダルシア州都セビーリャにあるインディアス総合文書館 (Archivo General de Indias) である。この文書館は、約400年に及ぶスペインのアメリカ大陸及び西インド諸島における統治に関する勅令、報告書、裁判記録、地図など、合計43,000点を所蔵している。その総ページは8千万ページにのぼり、収容棚の長さは直線距離にして8キロに及ぶという。「いつかこの文書館の史料を使って研究がしたい」と憧れて、是非訪ねようと心に決めていた場所だった。

現在文書館として使用されている建物は、16世紀以降、新大陸との貿易を統括した通商院で、ユネスコの世界遺産に登録されている。所蔵資料のごく一部が公開展示されているが、史料閲覧許可は明確な目的を持った研究者のみに与えられる。初めてこの文書館を訪ねたのは、メキシコ独立史についての修士論文を準備していた時だ。私は独立の過程がスペイン人の目にいかに映ったかに関心を抱いていた。ヌエバ・エスパーニャ (現在のメキシコ) を統治していた副王が、本国スペインの国王に送った報告書や書簡には恐らくまだ世に知られていないことが書かれているはずであった。私は意を決して、インディアス総合文書館の扉を叩いた。

「はい、あなたのだよ」と言って係員がドスンと文書の束を私の目の前に置いた。貴重な史料を乱暴に扱うことにまず驚いたが、その束の高さが30センチを優に越えることに更に驚いた。「えっ？私が読みたいのは副王の書簡1通だけなんですけど...」係員は怪訝な顔をしたが、「頑張っ探しなよ」と言い残して行ってしまった。初めて目にする古文書の束だった。仕方なく、上から順に1枚、1枚、丹念に読んでいく。手掛りは副王の

名と日付だけだった。1時間ほど過ぎただろうか、向かいに座っている研究者の顔が丸々見える高さまでになった頃、探していた書簡がようやく見つかった。この時初めて、史料探しは大海原に沈んだ財宝を捜す作業に似て、周到な準備と時間そして根気が要ることを知った。

以後、私の史料収集は月単位の長期滞在になった。関連文書をあらいざらい読んで、「宝探し」に没頭するのだ。発見した宝物をちりばめて歴史を再構築する楽しさに、すっかり取り憑かれてしまった。そして、ある時、「皇太子妃が新大陸に渡って統治することを了承した」との内容の文書に行き当たった。この文書の存在によって、新大陸の統治は副王をはじめ官僚に任されていたが、王族による新大陸の直接統治が16世紀半ばに検討されたことが明らかとなった。この点については未だに研究者からの指摘はない。まさにお宝発見である。

こうした史料探しには直感力が必要だ。私の指導教授は「歴史研究者としての自らの直感に従いなさい。そうすればオリジナルな研究ができます」と励ましてくださる。無論その直感力とは、研究テーマに関する圧倒的な知識と史料を読みこなす古文書学の技術に裏打ちされたものだ。そして、時代を感じ取る感受性豊かな心も大切だろう。

幾世紀をも越えて鳴り響くセビーリャの大聖堂の鐘の音を聞きながら、毎朝8時にインディアス総合文書館に吸い込まれるように入る。そして数百年前に書かれた文書の束をひもとく。閉館する午後3時まで、ひたすら読む。ただ、読む。騎士道小説を読みふけて遍歴の旅に出たドン・キホーテのように、私も文書を読み込むことで何百年もの時を越え、研究対象の時代にタイムスリップしていたのかもしれない。膨大な時間をインディアス総合文書館で費やして、初めて歴史に迫ることを学んだように思う。

たていわ れいこ (講師・ラテンアメリカ史)

